

聴覚障がい児に対する言語発達支援のための検査バッテリーの開発 —語の意味推論方略に焦点を当てて—

木村 淳子（慶應義塾大学 政策・メディア研究科 後期博士課程）

1. はじめに

先天性の聴覚障がいがあると、言語発達に支障をきたすことがある。聴覚障がい児の言語力には個人差が大きく、聴力レベルや補聴状況だけでは説明できない。健聴児は、新しくきいたことばの意味を、自分で推論しながら身につけていく。意味の推論にあたっては、その場の状況だけでなく、対象物の名称が未知・既知でも柔軟に判断を変更することができる（Imai, M, & Haryu, E 2001）。例えば、対象物が未知の場合には、新しくきいたことばを普通名詞として、既知の場合には固有名詞として解釈する（Imai, M, & Haryu, E 2001）。聴覚障がい児も同様に自分で意味推論をしながらことばを身につけていくと考えられるが、その方略については明らかになっていない。

2. 目的

聴覚に障害のある子どもが新しく聞いたことばの意味をどのように推論するかを調査し、今後の教育への示唆を得ると共に、言語発達支援のための検査バッテリーの開発を目指す。

3. 方法

先天性の聴覚障がいのある幼児・児童を対象として調査を行った。①は幼稚園及び小学1～3年生を対象に個別で、③は小学4～6年生を対象に集団で実施した。

①新規名詞の推論方略を調査するために子どもが見たことのないぬいぐるみを見せ、新規の名前を示した。いったんぬいぐるみをしまったあとで、複数のぬいぐるみや具体物（ぬいぐるみとは関係ないもの）を見せ、新規の名詞に合うものをすべて選択させた。子どもが見たことのある動物のぬいぐるみ（イヌなど）でも、同様の手順で行い、新規の名詞をどのように解釈したかを調査した。また、認知的柔軟性を調査するために、色・形・大きさが異なる見本のカード3枚を子どもの前に置き、カードを1枚ずつ示してルールに当てはまる見本カードを選択させた。分類の基準を途中で変更し、ルールを切り替えて分類できるかを調査した。

③意味が似ていることばの理解や使い分けについて調査するために、イラストの動作に当てはまる動詞を書き入れる調査、文脈に変化する形容詞の意味を問う調査、ことばとは裏の意味をもつ比喻・皮肉、登場人物の気持ちを複数選択する調査用紙を作成し、実施した。

4. 結果

①新規名詞の推論

先行研究で行われた健聴児の結果と異なり、対象が未知・既知に関わらず選択の割合に大きな変化は見られなかった。しかし、対象物が未知のものの場合には、形を基準として選択している傾向が強いのに対して、既知の場合には形が異なっても新規名詞の意味として選択されることがあった。DCCS 課題については、幼稚園段階では個人差が大きく、小学低学年ではほぼ天井に達した。しかし、小学生の段階でも課題が進むにつれてルールを忘れ、誤答するケースがあった。

②ことばの調査

動詞の調査では、「手袋を着る」などのように、より広い意味の動詞を使うケースがあった。皮肉の問題では誤答が多く、表のことばとは異なる意味をとらえることが難しい場合が多いことが示された。

5. 考察と今後の課題

名詞の推論調査からは、健聴児の先行研究の結果とは異なる意味推論を行っている可能性が示された。意味推論の方略には個人差も大きく、より詳細に分析していく必要がある。教育の場では、子どもが指導の意図と異なる理解や推論をしている可能性を考え、一人一人の思考の道筋を把握して教育活動を展開していくことの大切さが裏づけられた。高学年のことばの調査からは、似た意味のことばを適切に使い分けることや、ことばの裏の意味の読みとりが難しい場合があることが改めて示された。似たことばの使い分け方について子ども自身が意識したり、ことばの裏の意味について日常の会話や教科学習の中で丁寧に扱ったりしていくことが大切であると考える。

7. 検査バッテリー

本研究の結果をもとに、名詞推論・DCCS 課題・ことばの調査の検査バッテリーを作成した。